

2017 年度卒業式 学長式辞

今朝、私は普段と変わらず大学に立ち寄り、いつも通りにキャンパスの空気を感じてきました。例年になく開花の早かった構内の桜はそれぞれに咲き誇り、皆さんの門出を祝福しているかのようでした。このように春の装いが進み、希望に満ち溢れた今日の良き日、ここに埼玉大学卒業式を迎えられた 1,635 名の卒業生の皆さん、卒業おめでとうございます。埼玉大学長として、心からお祝い申し上げます。また、皆さんを支えてこられたご家族の方々に對しましても、深く敬意と祝意を表します。

皆さんが入学した 4 年前、学長になったばかりの私は、入学式でグローバル人材についてお話ししました。埼玉大学が用意した多様なグローバル人材育成プログラムに参加するだけでなく、**One Campus** で学び、大学生活を共にする 500 名を超える留学生との多様な交流や、海外での研修・研究発表など、「グローバル」に関わる沢山の機会を皆さん自ら、積極的に捉えることの重要性について触れています。そして、グローバル人材とは一体何かを問いかけ、皆さん一人ひとりが、「グローバル人材とは何か」を考えることが大切であると述べました。4 年経った今、皆さんはそれぞれに、程度の差こそあれ、「グローバル」や多文化を意識し、グローバル人材になりつつあるものと思いたいのです。

私が多文化を意識したのは、1990 年からの 2 年間、JICA の派遣専門家としてタイ・バンコクのアジア工科大学院 AIT で過ごした時です。准教授として、アジア各国からの優秀な大学院生の教育・研究指導に携わりました。帰国後に埼玉大学で環境科学・社会基盤国際プログラムを始め、学長になるまで留学生、日本人学生と一緒に橋の構造に関する研究を楽しんで行っていました。これは、主にアジアなどの途上国や新興国から優秀な留学生を国費奨学生などとして大学院に受け入れ、インフラの開発に伴う環境問題、自然災害の減災、災害対策など、環境科学と社会基盤工学に関する教育および研究指導を英語により行うもの。1992 年にスタートし 25 年間続いています。博士や修士の学位を得て帰国し活躍している留学生はこれまでに総勢 400 人を超え、国際ネットワークが形成されています。国際プログラムに関する研究室には留学生が多く、皆さんの中には留学生との協働を通じ、居ながらにして英語によるコミュニケーション能力や国際性を身に付けた人も多いと思います。出身の国も多様ですから、例えば研究室での懇親会で、国により留学生の食べられるものが違うことを目の当たりにし、これにより宗教や文化の違いを体験し実感したのではないのでしょうか。

このように「グローバル」は多様な局面を有します。大阪市立大学客員教授・塩川雅美先生が小論「ポスト「グローバル化」を見据えて」(文部科学教育通信 No.431、p.32-33、2018)で述べているように、大学の国際化は、単に英語で授業をすること、外国人留学生を数多く受け入れることや学生をたくさん海外に派遣することなどではなく、日本からは遠く離れた世界のどこかで起きた一見小さな出来事が、日本の私たちの生活に影響を及ぼすことを理解できるようにすることも一つの局面です。この意味で、卒業生全員が一堂に会するこの卒業式で、国連が定めた「持続可能な開発目標」Sustainable Development Goals、略して SDGs の 17 の目標を紹介します。これは、2030 年までの 15 年間で達成に努めるべき世界共通の目標です。(http://www.un.org/sustainabledevelopment/sustainable-development-goals/)

Sustainable Development Goals

Goal 1. End poverty in all its forms everywhere 貧困をなくそう

- Goal 2. End hunger, achieve food security and improved nutrition and promote sustainable agriculture 飢餓をゼロに
- Goal 3. Ensure healthy lives and promote well-being for all at all ages 全ての人に健康と福祉を
- Goal 4. Ensure inclusive and equitable quality education and promote lifelong learning opportunities for all 質の高い教育をみんなに
- Goal 5. Achieve gender equality and empower all women and girls ジェンダー平等を実現しよう
- Goal 6. Ensure availability and sustainable management of water and sanitation for all 安全な水とトイレを世界中に
- Goal 7. Ensure access to affordable, reliable, sustainable and modern energy for all エネルギーをみんなに、そしてクリーンに
- Goal 8. Promote sustained, inclusive and sustainable economic growth, full and productive employment and decent work for all 働きがいも経済成長も
- Goal 9. Build resilient infrastructure, promote inclusive and sustainable industrialization and foster innovation 産業と技術革新の基盤をつくろう
- Goal 10. Reduce inequality within and among countries 人や国の不平等をなくそう
- Goal 11. Make cities and human settlements inclusive, safe, resilient and sustainable 住み続けられるまちづくりを
- Goal 12. Ensure sustainable consumption and production patterns つくる責任つかう責任
- Goal 13. Take urgent action to combat climate change and its impacts 気候変動に具体的な対策を
- Goal 14. Conserve and sustainably use the oceans, seas and marine resources for sustainable development 海の豊かさを守ろう
- Goal 15. Protect, restore and promote sustainable use of terrestrial ecosystems, sustainably manage forests, combat desertification, and halt and reverse land degradation and halt biodiversity loss 陸の豊かさも守ろう
- Goal 16. Promote peaceful and inclusive societies for sustainable development, provide access to justice for all and build effective, accountable and inclusive institutions at all levels 平和と公正をすべての人に
- Goal 17. Strengthen the means of implementation and revitalize the Global Partnership for Sustainable Development パートナリシップで目標を達成しよう

AI や IoT に代表される社会変革がますます加速される状況にあつて、日本は、提唱する Society 5.0、超スマート社会を実現していくこととなります。東京大学総長の五神真先生によれば（「変革を駆動する大学 東京大学ビジョン 2020」、東京大学出版会、2017 年）、より良い社会の実現を目指す際に具体的な指標となり得るのが SDGs であり、企業と大学の連携がこれまで以上に重要になります。つまり、超スマート社会の実現には企業の成長が必要であり、この企業の成長と SDGs の達成とを矛盾しないように進めていく際に大学の果たす役割が求められます。また、15 年後の世界を担っていくのは、今この世界に生きる子ども達であるとして、埼玉県ユニセフ協会が SDGs に積極的に取り組んでいたり、埼玉グリーン購入ネットワークなどの環境団体が、SDGs の下、地域において 1 年 1 年地道に活動していたりして、まさに「Think globally. Act locally.」であることを再認識させられます。

ところで、東日本大震災の発生から7年が経ちました。復興への道のりは長く険しく続き、福島原発事故の原因究明も未だに進められています。しかし、社会は常に、こうした困難を乗り越えては成長します。そして、人間一人ひとりもそれぞれに、挑戦と失敗を繰り返して成長します。今日、卒業する皆さんも、学問をはじめとした新たなものごとに挑戦し、時には失敗して、を繰り返して、埼玉大学でそれぞれに大きく成長したことと思います。

この「学生の成長」とは何でしょうか。東京大学名誉教授の小林俊一先生は「一人前」と題した小論（IDE 現代の高等教育、No.598、p.2-3、2018年2-3月）の中で、次のように述べています。「学生の成長」を考えようとするのだが、なかなか難しい。・・教養の習得、専門知識と技能の獲得、自ら考える力の涵養、自我の確立などと並べるのはいいとして、物差しはどういうことになるのだろう。学業成績、一流企業への就職、大学院への進学、などはある程度の定量性ある尺度になるだろうが、もっと大事な「自我」や「考える力」などは図るのが難しそうだ。そこで「成長」した人を定性的にイメージしてみる。その人は他から見て、立派な人、ちゃんとした人、信頼できる人、間違いのない人、肝の据わった人、物わかりのいい人、まともな人、友達にしたい人、頼みがいのある人などなど、形容句はどんどん思いつく。集約すると人間的に成長した「一人前の人」と言えそう。つまり、世の中に出してもやっていける人。」そして、大学生が社会に出る時に要求されるのは、社会が求める資質、企業が求める資質、自己が求める資質など多様、かつ互いに矛盾するものである、とした上で「成長とは自力でするものか、誰かにさせられるものか。」と締めくくっています。

私としてはどちらもあるものと考えますが、卒業を機に、4年間で得た資質の観点から、皆さん自身が自己の成長を振り返ってはどうか。その上で、今後のさらなる「成長」に参考になりそうな資質について、識者の意見を紹介しましょう。それは、センスと直感力。哲学者で京都市立芸術大学学長の鷺田清一先生と、ゴリラ研究の世界的権威で京都大学総長の山極寿一先生の対談を納めた著書、「都市と野生の思考」（インターナショナル新書 013、集英社、2017年）の中で語られています。二人の話題は科学者に必要なセンスや直感力についてですが、科学者を高度職業人に置き換えて考えることにします。

鷺田先生は言います。「今の世の中はわからないものだらけじゃないですか。科学の世界だけでなく、社会情勢も、時代の流れも、本当に複雑さを増してきている。何が決定的要因なのかわからない状況の中で、不確定要因の相互作用みたいなものだけで、物事が決まっていく。こういう複雑性を増す社会の中で生きていくには、「ここを押さえておかないといけない」などというあたりをつける感覚が非常に重要になってくる。」

これに対して、山極先生は次のように応じます。「まさにセンスですね。論理だけをいくら考え出してもダメで、何かの現象に出会ったときに「これだ！」と閃かなければ学問にはならない。そういうセンスは自然の中で鍛えられるが、自分が何か見つけたとしても、それを自分で判断するのではなく、ネットで常時つながっている仲間に報告する。そんなことをしていたら、自分の体験としての直感力を鍛えることなどできるはずがない。」

要するに、社会の中で生きていくには「ここらあたりが勘所」などというあたりをつけるセンスと、論理を考え出すことに加えて、何かの現象に出会ったときに「これだ！」と閃くことのできる直感力がとても重要だということです。そして、こうしたセンスや直感力を鍛えておくことが、もう一つの資質、判断力にもつながります。

最近、埼玉大学卒業生の活躍が目立ちます。この3年で実に学術、文化、芸術の各分野にて卒業生の活躍が認められました。「埼玉大学 All in One Campus at 首都圏埼玉～多様性と融合の具現化」を掲げる埼玉大学の本領発揮です。彼らはみな、出会いの大切さを、そして出会ったときの直感力の大切さを教えてくれます。

一人目は、2015年ノーベル物理学賞を受賞された梶田隆章先生。彼は埼玉大学理学部を1981年に卒業しました。「本当に物理学の研究を志したのは大学院生の時。幸運なことに、良い師、仲間、研究プロジェクトに出会いました。」と語っています。彼の「出会い」には観測データとの出会いも含まれます。観測データと計算値とのずれに気づき、その解明に専念してニュートリノ質量の発見につなげたとのこと。そして、こう続けます。「広く目と心を開いて、大切なものに出会ったときのための準備をして下さい。」

二人目は、2016年11月に妖怪研究の業績で文化功労者に選ばれた小松和彦先生。1970年、埼玉大学教養学部の卒業です。在学中に文化人類学に出会い、埼玉県両神村でのキツネつきなどに関する調査をきっかけとして研究者の道を歩んでいます。埼玉大学での講演の際、「研究はつらくても、同時に楽しい謎解き。勉強するとき、まずは楽しむことを一番の柱にして頑張ってください。」そして、「埼玉大学に来なかったら今の研究はしていなかったかも知れません。チャンスを見つけて自分の道を切り開き、活躍してほしい。」と語っています。

三人目は、雪景色の油彩で著名な洋画家の根岸右司先生で、2017年末に権威のある日本芸術院に推挙されてその会員になりました。彼は埼玉大学教育学部の1961年卒業生で、在学中に生涯の師となる渡邊武夫先生に出会い、県立浦和高校などの美術の先生をやりつつ画家として活躍され、現在は日展の理事も務めています。埼玉大学にて懇談した際に渡邊先生の指導を振り返られ、「郷土の偉大な芸術家の姿を目の当たりにしたことは人生の財産になった。とても怖かったが、有難かった。」と語っています。

埼玉大学は2019年に創立70周年を迎えます。そのキャッチフレーズを「つなげよう未来へ」としました。今、紹介した三人をはじめとして全ての同窓生が、埼玉大学70年の歴史をつなぎ、皆さんはこれまで現役の学生として同窓生とつながり、同窓生の恩恵にあずかってきました。これからは新しい同窓生として後輩たちに影響を及ぼし、歴史をつないでいってください。皆さんがこれからも多様な人々やものごとに出会い、直感力を働かせ、幸運にも恵まれてさらに成長し、それぞれに節目の点をつないで作る人生が充実したものとなることを心から祈念します。また、皆さんが知のプロフェッショナルとして、埼玉大学同窓生として、グローバルに、イノベティブに、知識社会で活躍されんことを大いに期待したいと思います。埼玉大学はこれからも、皆さんを有形、無形にサポートします。そして、皆さんそれぞれの活躍を何よりの財産として、埼玉大学はより一層輝きつつ、その歴史をつないでいきます。

平成30年3月27日

埼玉大学長 山口宏樹